

観光のまなざし・観光の身体

—— 1872年～1906年の京都円山における、ホテル、
サイトシーイング、外客をめぐる試論 ——

エリオット・アンドリュース

腰を下ろすと、窓から世界で最もきれいな景色の一つがみえる。町とその向こうにある丘陵、うっそうとした松や竹、流れ行く雲は、寺や仏塔の屋根に影を落としてたり、明るく照らしてたりしている。丘の頂へ続く坂に草木の姿は無く、すべては雪に覆われている。この絵のような景観は本当に優れている。雲が低くたちこめる日もあるだろうが、そんな時はこの光景を思い出したらいい。¹⁾

メリー・プラットの著作『Imperial Eyes』は、1992年に出版されてから来年で30年になるが、19世紀英文旅行記の研究に、いまだ強大な影響力を有している。上記のようなパノラマ式の文章に対し、プラットは「私の視界に入るすべてを支配する者 (Monarch-of-all-I-survey)」という用語をつけて、以下のように説明をしている。「ヨーロッパ人旅行者は、自らが高いところに立ち、非ヨーロッパの景観を、多くの形容詞を以て描写しつつ、それらに美的、経済的、あるいは戦略的な評価を与えている」。このように見ていくと、視察される者は視察者に従属し、いわば客体として規定されることとなる。いうなれば、プラットはテキストを非欧米の植民地化という文脈で捉え、テキスト内の空間的「秩序」をテキスト外の国際政治秩序に関連づけているのである。このような「私の視界に入るすべてを支配する者」といった見方は、「帝国のまなざし」という概念の中で重要な役割を引き受けており、このような分析こそ、ポストコロニアル研究において学問的通過儀礼になっているといっても過言ではない²⁾。

文体上のレベルのみで考えると、上記引用文とプラットらが分析した紀行文と

のあいだに違いはほとんどない。旅行者（＝語手）が、地平線にある山々から下にある町まで眺め、全体を見渡すでしょう。すると、その旅行者は、一般的特徴及び詳細を取り上げつつ、これが全体像になるようアレンジを加えながら、目の前の風景について自らの美的判断を下す。例えば、絵のように美しい風景であれば、陰鬱な日常生活に帰っても、この景観を思い出すと元気が回復するというようなものである。こういったことは、近代観光の範中では、ごく普通の反応といえる一方で、ピクチャレスクの審美学理念の影響も強く見受けられる³⁾。絵になった景観に対して視察者は肉体のない目のような存在である。どこにでも行けるし、なんでも見えるが、見られることはない。つまり、「私の視界に入るすべてを支配する者」の場合、権力は肉体ではなく視覚に基づくものであり、これはまさにミシェル・フーコーが提唱したパノプティシズムという概念に合致するものである。

このような方法を通して、一見無害に見える景観のイデオロギー構造を分析することができる。しかし、ここに潜む帝国主義についてまで確認出来ることはそう多くはない。また、景観についての細部の検証も不足しており、窓から景色を見た旅行者の立場性（さらに個人性）などに至っては、殆ど議論すら行われて来ていない。

冒頭であげた引用に背景を加えてみよう。1889年1月にアメリカ人の漫遊者グッドウィンが、妻とともに京都を1週間旅行して「也阿弥」というホテルに宿泊した。「也阿弥」は京都市東山の麓に位置する円山地区にあった外国人用のホテルで、早くから円山ひいては京都の近代史において重要な役割を果たしてきた場所である。訪日の翌年、グッドウィンは、『A Winter in Japan and China』という旅行記をおそらく自費で出版しており、そのなかで、上述のようにホテルの部屋から見渡す京都の町全体の様子を取り上げている。グッドウィン夫婦が京都を訪れた1889年といえば、安政条約がまだ改正されていなかった時代であり、外国人は治外法権の保護下にあったものの、自由に内地を旅行することはできなかった。そのため、京都へ行くのにも「外国人旅行免状」が必要だったのである。このような文脈に鑑みると、『A Winter in Japan and China』に記録されている景観が、単純に帝国権力の記号及び装置であると結論付けることは早計と言わざるを得ない。

本論文は、円山周辺からのパノラマ式景観を、上記のような法律の制約、さらには物体のアフォーダンスと肉体的能力、メディアとテクノロジーの変化、さらにこれらを包含する〈語り〉の可能性というネクサスにおいてグローバルや国内及びローカルなレベルに見られる様々な社会的主体の活躍といった背景を踏まえた上で、「景観を構成する歴史的・文化的・物理的なプロセスはどのようなものであるのか」、「景観を前に観光客は如何なる経験をしたのか」、そして「景観の意味とは何か」という3点について考察するものである。

本稿は、19世紀後半から20世紀初頭へかけた近代日本のインバウンド観光研究であるとともに、欧米旅行文学研究のひとつの試みであるが、円山とその周辺のホテルをケーススタディとして取り上げたのは、明治初中期のこの地区が、京都の中でも近代化が早く進んだ場所であり、当時のインバウンド観光の中心であったにも拘わらず、京都博覧会と円山公園についての先行研究こそあるものの、東京や横浜に比べると詳細な研究は未だ少ないためである⁴⁾。外国人観光客にとって、京都は当時も大変人気の高い観光地であったものの、条約港の遊歩区域外であり、しかも箱根のようなリゾート地でもなかったため、ある意味、観光地としては例外的な場所なのであった。

また、一般に日本の近代観光産業の歴史は、1912年の半官半民機関ジャパン・ツーリスト・ビューローの創立で幕を開けたと言われるが、その一方で、それ以前の旅行産業がどの時点で根本的な変容を遂げたかについては多分に検討の余地がある⁵⁾。したがって、本論文は、1872年の京都博覧会から1906年「也阿弥ホテル」の焼失までに焦点を当てる。

明治期日本のインバウンド観光の歴史だけでなく、本稿の論点は、観光の「まなざし」と観光の「身体」にある。ポストコロニアル研究における「帝国のまなざし」同様、社会学的な観光研究においても、観光の「まなざし」という非常に影響力のある概念は、フーコーのパノプティズムに基づいている。しかし、近年、これに対しては異を唱える声も上がっている。ヨナス・ラースンによる、観光学研究は「目ばかりで身体がない」とする主張もその一例と言える⁶⁾。

そして、アフェクト理論の影響を受けて、概念を拡大した観光世界の「意味づけ」もまた顕著に多様化しており、観光のまなざしについては、当初と異なる身体的な観点から論じられるようになってきている⁷⁾。これによって、観光客と観

観光のまなざし・観光の身体

光サービス業の人々、ローカルとの関係を間主観的に分析できるようになり、環境や建物などのアフォーダンスに対しても、新たな方法論が提供されることとなった。とりわけ観光写真の研究は挑戦的で、分析対象が写真のみであったところ、写真を撮るという実践にまでその対象を広げ、発展を遂げている⁸⁾。本論文も、同様のアプローチを以て、観光の「まなざし」を、身体的な習慣のなかに位置付けつつ、旅行記という文脈を通じて歴史的に分析するとともに、円山とその周辺ホテルからの景観描写、及びホテルから景観を眺める実践（と関連した観光的な実践）について検討を加えていく。

但し、社会学の方法論を、歴史学に容易に転用することは危険である。旅行記とは、対象読者のために書いた商業的な資料であり、実地調査とも違い、出所不明の情報でもなく、自分の社会的な習慣を自省するために構想されたものでもない。描写する作品に加えて、その描写することに対する自省さえも、旅行記から読み取ろうとするのは贅沢といえるであろう。調査と非表象理論の関係（むしろ無関係）ということは別にして、理論的に考えると、旅行記中に身体を発見するという作業はあまり意味を持たないかも知れない⁹⁾。そこには、身体ではなく身体の表象しかないとも言えるからである。しかし、ブルース・スミスが論じた「歴史的な現象学」の方法論に倣えば、こうした表象的難局も打開することができる。つまり、言葉＝モノを表象する記号から、言葉＝モノを直接示す指標へと分析の到達点を入れ換えることによって、旅行記のような文学的及び歴史的な資料を、もっとも豊かに解釈することができるようになるのである¹⁰⁾。

外国人観光客と京都の近代

19世紀後半から20世紀初頭へかけての京都は、人気のある観光地ではあったものの、横浜や東京、あるいは箱根や日光とは物理的な相違点があり、近代観光を検討するに当たって、ある意味で際立った場所といえる。京都は条約港の遊歩区域外の地域にあったため、1899年の条約改正まで、旅行の際には外国人旅行免状が必要であった。箱根などのリゾート避暑地への旅行も同様の規則が適用されるが、京都は大都市地域である。しかも、東京や大阪と違って外国人居留地もない。何人もの外国人が、教育や布教の用務で滞在していたが、滞在外国人共同体も無いと言って良い状況だった。こうしたイベントに参加し、招待状を受け取

るチャンスが少ないため、観光地「日本」の中でも、京都はより日常から離れた観光の地と思われ描かれていた。そのため、大勢の観光客、特に世界漫遊者にとって、京都を訪れる一泊二日の旅程はサイトシーイングと買い物で満ち溢れており、それを終えると神戸へ急いで帰って汽船に乗るのであった。

それ以前の京都は、1864年のどんでん焼き¹¹⁾、あるいは1868年と1869年の東京行幸の結果、人口減少や景気後退とともに威信失墜という窮状に直面しており、さらに外国人のあいだでは、1868年のパークス襲撃事件などの印象も深く、京都は攘夷論者の巢と見なされていた¹²⁾。しかし、1870年代の初めから、彼らが京都に抱く印象は、敵意に満ちたイメージから、親切なもてなしのイメージへと急速に変化していった。こうした一連の流れの中において、外国人観光客向けの宿泊施設が果たした役割は極めて重要であった。

この当時、八坂神社（祇園社）の東辺にある円山という東山麓を中心とした地域では、大規模な土地や建物の再開発ではなく、「創造的な再使用」という政策が採られている¹³⁾。これには、以下三つ理由が挙げられる。まず一つ目は、この地域に根付いた娯楽の伝統である。丸山宏や出村嘉史、今江秀史などによる詳細な研究にあるとおり、江戸期に入ると、山辺下部にある八坂では、「享樂的な雰囲気は多くの人をひき付け、いわば京の応接間として諸国から誘客を魅了した」という¹⁴⁾。すると、山辺上部にある時宗寺院にも娯楽施設が増えていった。ここでとりわけて大切なのは安養寺境内にある「六阿弥」と呼ばれた塔頭である。これらの塔頭は、江戸中期から「席貸が行われ、飲食、宴席の他、展観などの文化的な交流の場として」京の町人にも旅行者にも使用されていた¹⁵⁾。二つ目の理由としては、上記の「創造的な再使用」という方針に最も直接的な影響を与えた出来事とも言える、1871年、1875年の社寺上地令が挙げられる。同令により、安養寺の六阿弥を含む円山の敷地が明治政府に上地されたことで、人々を惹きつける魅力が減少したのである¹⁶⁾。最後の理由としては、円山が古くからの道路網とも近代の交通網とも比較的近接した場所に位置していたため、観光客が集まり易かったことが挙げられる。西山にも同じような景色や名所が存在していたが、東海道の終点となる三条大橋、伏見港や七条停車場（京都駅）といった交通の要衝からより遠い場所にあったため、宿泊の中心地とはなり得なかったのである。

こうした再利用の動きは、明治維新直後から始まっていた。例えば、1868年、

八坂神社境内にあった二軒茶屋は、洋室を8部屋有する二階建て建築の中村屋（中村楼）というホテルに変貌を遂げている¹⁷⁾。このホテルの所有者は、同年に神戸（兵庫）が開港されたことに伴い、外国人の京都旅行が増えるのではないかと期待していた。しかし、内地旅行は依然として禁止されたままで、1872年の第一回京都博覧会開催まで一般の外国人が入京を許可されることはなかった。因みに、同博覧会の外国人入場者数は770人を記録しているが、京都府と民間の半官半民組織「京都博覧会社」は、この時の外国人訪問者に対して様々なサービスを提供しており、これこそが、ジャパン・ツーリスト・ビューローの先駆けといえるであろう。例えば、条約港には宣伝のために案内所を設け、宿泊設備を三つのクラスに分けて用意している。展示会場であった知恩寺の塔頭5カ寺は貴賓用で、一般外国人のためには、円山や河原町周辺に19軒の宿が用意された¹⁸⁾。1872年11月19日付のロンドンタイムズには、博覧会に関する記事が掲載されている。その著者は「知恩ホテル」と称する施設に泊まり、宿泊客500人に及ぶ収容能力、そして西洋式の家具に感嘆し、食事についても「アメリカやヨーロッパで食事をしているように感じる」といった具合に賛辞を与えている¹⁹⁾。博覧会社が、神戸を通してサンフランシスコから食べ物と飲み物を輸入したことが功を奏したようである。

1873年の第二回博覧会は京都御所で開催されたが、円山周辺は、この時も外国人向け宿泊地として利用された。同時期に京都の内外から来た起業家も、外国人観光客をターゲットとした宿泊施設の建設に円山の敷地を購入し建物を再利用していた。同年には、かつての長楽寺と安養寺の春阿弥の敷地を手に入れた明石博高が「吉水温泉」という人工の温泉リゾートを開業している。京都近代化の中心的な役割を担っていた明石は、博覧会の開催にも力を注いだ。

1876年から77年頃になると、京都の外からの出店も活発になった。まず、大阪「自由亭」の創業者で、西洋料理家の草野丈吉が八坂神社の大鳥居前に同洋食屋の京都支店を出店すると、1879年、長崎の出身で通訳ガイドも行ってた井上万吉が、「也阿弥ホテル」を開業した。井上は、上地された土地の払下げで六阿弥のうち何軒かの建物を購入し、也阿弥を日本座敷から洋室に改造したのである²⁰⁾。ガイドブックや旅行記によるとその評価は上々で、「也阿弥ホテル」は京都随一の外国人用ホテルとなった。当初は2階建の和風建築で看板には

「HOTEL」と書かれていた²¹⁾。部屋の間にドアがなく襖^{ふすま}だったが、ベッドを備えており、食事は西洋料理を提供していた。そして1894年には、立派な4階建建築に拡張している。

開業から10年ぐらい経った頃の1888年に、レジナルド・ミットフォードは、このホテルの部屋を次のように描写している。

新築別館の、とてもきれいな部屋に通された。壁と天井には素敵な和紙が張られていた。白い床には、金箔のうちわがきれいに置かれている。ヨーロッパ式のベッド、椅子、テーブル、洗面台が設えてあった。²²⁾

吉水温泉に並ぶ「也阿弥ホテル」の開業によって、「明治維新以来絶えていた円山周辺の求心力は回復することになった」と今江秀史は述べているが、こうした施設の利用状況や、客筋、文化的な意味合いを考慮すると、この地域が元の状態に戻ったとはいえない²³⁾。



図1 「也阿弥ホテル」の写真「KYOTO. YAAMI'S HOTEL, IS VERY SPLENDIDLY SITUATED ON THE SIDE OF A HILL AND OVERLOOKS THE WHOLE CITY」。H. E. Bottlewalla。
国際日本文化研究センターのご厚意により転載

「也阿弥ホテル」の観点から京都へ

東山麓の台地にそびえ立つ「也阿弥ホテル」は、あたかもすべてを圧して円山を見下ろしているかのようであった（図1）。実際、京都を訪れる観光客のなかには、同ホテルを目印にしながら市内観光をすることもあったであろう²⁴⁾。だが、「也阿弥ホテル」は、ただ視線を引きつけて目印になるという視覚的な引力を超える存在でもあった。京都に到着するや否や、このホテルを目印に町中を移動することが出来るということ自体が、京都を創造していく過程においても強い影響力を発揮することとなった。つまり、他の国にある大規模なホテルと同じように、「也阿弥ホテル」はこれを中心として具体的かつ象徴的に空間を改造する力を持っていたのである²⁵⁾。このことを説明する際、三条大橋の例は非常に有意義である。というのも、日本の名所案内記において三条大橋は、旅程の出発点として1880年代を通じて重視されていた。しかしながら「也阿弥ホテル」創設以降即座に、英文ガイドブックでは、円山もしくは「也阿弥ホテル」を旅程の出発点として紹介するようになった²⁶⁾。1889年の旅行記においてウォルター・ディクソンはこうした求心力について以下のように論じている。

旅行者は、東寺の近くにある駅で汽車を降りる。そのあと、円山の上にあるヨーロッパ式のホテルへ向かうのだが、私たち外国人は、車夫の引く人力車に乗って町の中を駆け抜けていくというのが定番ということのようだった。²⁷⁾

1870年から京都観光の中で円山が中心的な役割を担うようになったのは、近代において旅行の動向が変化してきたことによるものといえる。とりわけ、鉄道で旅行ができるようになったことで、旅そのものより目的地に到達することが優先されるという風潮になった点は特筆に値する。また、ガイドブックが合理化かつ標準化されたことに伴い、目的地別の紹介ページの一番初めの項目にはホテルが掲載されるようになった。つまり、観光客にとって到着した目的地についての最も重要な情報は、宿泊施設であったということなのである。しかし、円山は、ガイドブックに掲載されただけで観光客の目を引く存在となったわけではない。

実際のところ、京都を訪れる観光客にとって円山が大きな意味をもつ場所であることには疑いの余地がない。上記の引用からもわかるように、円山は京都への到着シーンで取り上げられることが多く、そこから観光客による町体験を、肉体的なレベルで読み取ることができる。つまり、駅に着いて直ちに人力車に乗り、急いで町を通り抜けてホテルへ向かうのだが、そこにかけてられる文章の量は1行ないし2行程度である。そしてホテルに着いた途端、語りがサボタージュをしようやく京都の紹介へと移っていく。ここから、駅やその後の道中ではなく、宿泊先のホテルこそが京都到着を表象しているということを明確に読み取ることが出来る。

横浜や長崎との対照はたいへん興味深く、旅行記の到着シーンが物語化される効果だけでなく環境のアフォーダンスとも関連していることを示す根拠となる。太平洋を横断してきた汽船や中国からの汽船の乗客が降り立つ横浜と長崎は、日本への到着シーンとしても重要な役割を担う。こうした主要な港町の場合、汽船がそれぞれの湾に入り、ボートで棧橋へ、そして棧橋からホテルへとという流れで、旅行者は最初からパノラマ式の到着を体験しているかのように語られることが多いが、京都の場合、おおよそ人力車は「かなり広いマカダム舗装道路」や「平坦な道」を通り「街中を疾走して」ホテルへと向かい、周りの様子にあまり関心を抱く余裕を持たせぬままホテルに辿り着くように語られる²⁸⁾。これには、盆地という京都独特の地勢も関係しているものと推察される。なかには、京都の地形は南が北より位置が低いため、七条停車場に出ても観光客は京都の景観を見通せないという見方もある。次の引用は、鉄道開業前の記述であるため、伏見港から入京した旅程に言及したもののだが、同様の状況を端的に表す例と言えるであろう。

人力車に乗って、延々と続く7マイルの道をひたすら京都へ向かった。町のなかで最も低いところから洛中へ向かうのは印象的な経験ではない。はっきり言えば、「知恩院ホテル」に到着して振り返るまで、どこにいるのかまるでわからなかった。²⁹⁾

2018年に著された近代京都に関する著作の中で、アリス・ツェンは入京変更の象徴について触れている。三条大橋という江戸期までの京都の玄関口が、明治

期になると鉄道の駅に変更され、これによって入京の場所はまさに平安時代に戻ったかたちとなり、近代の旅行者は、駅から七条通に出る際に「回復された平安時代の帝都を体験しているように」なったわけである³⁰⁾。実際、日本人の訪問者がどう感じたかは別として、こうした歴史的な象徴は外国人観光客には理解されない。外国人観光客にとっては、御所をいただく北向きの景観ではなく、円山のホテルから見る西向きの景観こそが京都を表すものだった。そして、後者の景観は文書及び絵画や写真を通じて様々な外国人の訪問者に往々描かれた（図2・図3）。

円山には「也阿弥ホテル」以外にもパノラマ式景観を与える幾つかの場所、例えば吉水温泉や八坂神社の塔および將軍塚などがあった³¹⁾。しかしながら、それらと異なり「也阿弥ホテル」の宿泊者は早朝であれ夜更であれいつでも京都の景色を見ることが可能であった。しかも、リラックスできる自室から京都の町がまるでプライベートな景観であるかのように眺望できた。このような景観は、ホテルのデザイン自体への支持にも繋がった。1876年にアン・ブラシーが「円山にあるホテル」に泊まった折のことを回想して、窓にガラスが設えてあったお陰で障子を開けずに「冬でも心良く見晴らし」ができたと評価している³²⁾。「也阿弥ホテル」は、その後、1894年の改修時に部屋の半分以上をベランダ付きで「景観を楽しめる正面部屋」とし、それが同ホテルにおける広告戦略の支柱となった（図4）。ホテルの所有者たちは、顧客に対する重要なセールスポイントが「景観」であることをよく理解していたのだ。

『日本之名勝』という1900年の英日の写真集にみられるように、円山からの全街景観が近代京都の名所として登場してきたのは、インバウンド観光発展の結果だといえる（図5・図6）。他方で、東山の景観を巡る歴史は複雑である。江戸期の旅行ブームを追い風に、1770年代の東山も名所記や名所図会に背景として描かれることはあったものの、東からの街景観は名所関係の視覚芸術に含まれることはなかった。しかし、東山から景観を見る習慣が全くなかったというわけでもない。特に、東山に属する六阿弥の席貸は、丘の斜面を利用したもので、ここからの景観は東山名勝図会でも「各書院より都下西野を一望して景致他なく違反かたなし」³³⁾と言及されているとおり、称賛的となっていた³⁴⁾。明治期に入って、山本覚馬が著した「The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto」でも、円山の



KIOTO, FROM AYAMI'S HOTEL.



「也阿弥ホテル」からの景観。

図2(上) “Kioto, from Ayami's Hotel,” R. C. W. Reveley Mitford, *Orient and Occident* (London: London, W. H. Allen & co., 1888), 110-11より

図3(下) John La Farge, American (1835-1910), *View Over Kyoto From Ya Ami* (1886). Transparent and opaque watercolour over graphite. 22.67×36.99 cm. Museum of Fine Arts, Boston. William Sturgis Bigelow Collection 21.1441. ご厚意により転載

景観は高く評価されている。同書は、京都について初めて書かれた英文ガイドブックで、1873年に開催された博覧会にあわせて出版したものであるため、京都の近代的な観光資源などを強調するような作りともなっているが、円山を取り

Advertisements. 3

YAAMI HOTEL,
MARUYAMA, KYOTO.

THIS FAVOURITE AND LONG-ESTABLISHED
HOTEL,
having been recently enlarged by the addition of two new buildings,
AND
RENOVATED, NOW CONTAINS
75 ROOMS OF WHICH 40 HAVE FRONT ASPECTS.
It is Situated on Maruyama,
A SUBURB OF THE OLD CAPITAL,
Commanding Panoramic Views of the City,
AND
Renowned for its Picturesque Scenery.
Beautiful Walks in the Immediate Vicinity.
ROOMS ALL WELL VENTILATED,
AND
COMFORTABLY FURNISHED IN EUROPEAN STYLE.
The Hotel is Distant from the Station only 20 Minutes.
MEALS PREPARED BY AN EXPERIENCED COOK.
Can be Served at all Hours.

図4 「也阿弥ホテル」の広告。Basil Hall Chamberlain and W.B. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan*, 4th ed. (London: John Murray, 1894), advertisements より

上げた項目は、近代以前より長きに亘って続く京都の娯楽習慣に重きが置かれている。つまり、円山の「もっとも明るい都の景観」とは、外国人訪問者のために設けられたものではなく、むしろ、山本が書いたように地元民の娯楽に起因するものであり、言い換えれば景観を楽しむ行為とはローカルがすでにやっている伝統を眺める行為を指し示しているのであった³⁵⁾。こうした伝統は、外国人観光客によって書かれた旅行記に含まれることはなかった。したがって、高木博志が論じたように、明治期に入ってから京都を見下ろす景観とは、確かに新しく生み出されたものとして表出した³⁶⁾。このことを也阿弥に限ってみると、塔頭の也阿弥はホテルの也阿弥と敷地などを共有してはいたが、その明治期の景観は、行為としても表象としても同じにはなり得ないものであった。

「也阿弥ホテル」から京都の町並みを望む行為をどう読み解くかについては、

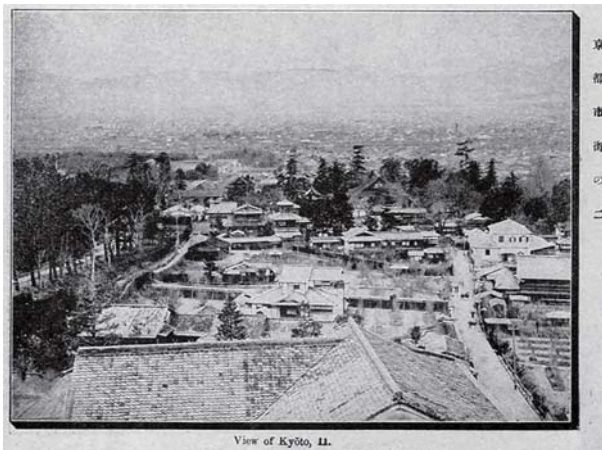
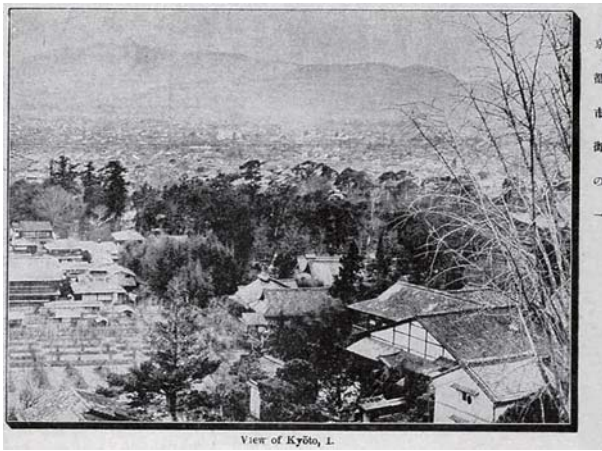


図5・図6 「京都市街の一」「京都市街の二」。瀬川光行 編『日本之名勝』史伝編纂所、1900年より

本論文冒頭ですでに述べたとおりである。なによりも、景観を眺めることで、外国人観光客は自分自身を具体的かつ象徴的なその場の照準や位置に同化させていく。こうしたプロセスは、単純に目の前にあるものを確認する、いわば自己と対象を関係付けて構想する行為にあたる。他方、観光の場合、目に入るものすべてが、視察者にとって相貌的な理解の対象であるだけでなく、楽しみ、また消費し

観光のまなざし・観光の身体

得る対象ともなる。

町が地図のように広がっている。ルーペを使って、主なお寺や皇居、その他の名所を見つける。遙か前方に見えるのは大阪から来た道だ。後方には琵琶湖へ続く道が延びていて、今度はそちらへも旅行したいと思っている。この辺り一面には、明るい日の光に照らされて木々の生い茂る山と肥沃な平原が広がっている。

この記述から、京都の町並みは観光地図のように広がっていることが分かる。それぞれの名所が際立っているため、観光客はその一つひとつを確認しながら旅程を練ることもできたことであろう。1899年に発行された新聞『ジャパントイムズ』において、京都は「外国人観光客のリゾート」として絶賛されたが³⁷⁾、上記引用はこれを傍証する好例といえるであろう。町全体が観光客にとっての名所となっているのである。

旅行記あるいは旅行自体においても、パノラマ式景観は大切な要素であり、これこそがまさに「観光（サイトシーイング）」の契機となっている場合も多い。「ガイドさんがもう人力車を用意してくれていたのので、私たちはすぐに也阿弥ホテルを出発し、盆地を曲がりくねって進んで行った。」と、M・B・クックが1891年の旅行記に書き残しているように、経験した時点ですでに、視覚的な重点の変更が行われている。例えば、クックが立ち寄った旅先のうち保津川下りの体験について、彼は、「私たちが降りた」、「私たちが買った」、「私たちが座った」、「私たちが乗った」といった具合に、観光客の身体に着目し、肉体的な行為を重視した描写を展開している³⁸⁾。こうした光景の中心にある行為が主体はもちろん観光客自身であり、周りの人々（車夫、村の子供たち、船頭、茶室の女中）は、観光客の楽しみを増幅させる役目を担っている。つまり、その時の観光客の感情は、「権力という文脈のなかに湧き上がっている」とも捉えることができる³⁹⁾。それでも観光客は、間違いなく他の人々と同じ空間と時間のなかにともに存在している。観光客以外の人物が詳しく描かれることはなかったものの、こうした体験は、景観と違って間主観的な構造を作り上げてきたといえる。

観光活動あるいは観光自体を語る対象として、保津川下りは寺社見物とは随分

異なっていた。京都の観光というとまず以て寺院が想起されるが、外国人観光客の多くにとってそれらの見物は、「やりたいこと」というより「やらなければならない」しきたりのようなものだったのだという。実際、「寺院について説明が多すぎないかという懸念がある。」⁴⁰⁾とか、「京都には何百のお寺ある。二、三カ所を紹介してもらえたら充分だと思う。」⁴¹⁾といった意見、また、なかには、「もう十分だ。お寺は全部一緒だ。」⁴²⁾といった記述まで残されている。殆どの観光客は仏教に関する知識を持ち合わせておらず、お寺で説明を受けたとしても、ガイドからの説明になるのか、ガイドが通訳してくれるのか、何れにせよコミュニケーションの円滑でない場合が多い。しかも、寺社見物は限られた旅程の中に詰め込まれた予定のひとつでもあったため、観光客は余計に、「疲れた」、「切り離された」、あるいは「困惑した」といった印象を受けたのであろう⁴³⁾。「私たちは大変疲れたので、道を引き返し、ホテルに続く長い階段を登って行った。」「あまりにも疲れたので、多くを見物出来ぬままホテルへ帰った。」「死にそうなほど疲れ果てた状態でホテルに着いた。」などの表現が旅行記に多く認められるように、旅の1日の終わりには、サイトシーイングの限界が、身体とその能力とに連動したかたちで表現されることが多い⁴⁴⁾。

「也阿弥ホテル」が（肉体のない目の為の）景観だけでなく、（肉体の疲れからの）回復をも提供できるのは、その地理的な位置と、建物のデザイン、及びホテルの従業員らの労働のおかげである。旅行記のみを読むと、こうしたモノとヒトは、単に外国人観光客の楽しみをもたらす存在でしかないように見えるが、前述の通り、こうしたサービスの発展の陰には様々な行為主体性があった。「也阿弥ホテル」は、1899年に大火事に見舞われるまで京都随一の西洋式ホテルとして営業を続けたが、その7年後、吉水温泉と共に焼失し、惜しくも閉館を余儀なくされた。跡地は京都市が購入し、円山公園を現在の境界まで拡張している。「也阿弥ホテル」はその開業時だけでなく、閉業の折にもなお、東山が近代的なレジャーの中心地となるプロセスに強い影響を与えたといえるであろう。

「都ホテル」の絵葉書に写る観光の身体

これに取って代わったのが、1900年、京都市街を望む東山の華頂山麓に開業し、まさしく「也阿弥ホテル」の後継とも称えられた「都ホテル」である⁴⁵⁾。し

かし、そのように言われるほどの要素を「都ホテル」が継承していたかという疑問が残る。両ホテルが各々制作した絵葉書を対照すれば、景観だけでなく、ホテルの造りや使用の違いは一目瞭然である。「也阿弥ホテル」の営業期間は絵葉書ブームの到来以前であるが、ホテル正面やベランダからの景色を写した絵葉書がいくらか残されている。「都ホテル」についても同様に周辺の景色を写した絵葉書が多いものの、20世紀初頭に作られたと思われる何枚かの絵葉書には、同ホテルの誇るベランダやダイニングルームを写したものや、なかにはホテルの空間や周りの景色だけではなく、新たな対象となる観光客自身を写し込んだものもある(図7・図8)。こうした絵葉書では、景観自体より、景観を楽しむことので



図7・図8 絵葉書「都ホテルのベランダと其の眺望」。都ホテル。個人蔵

きる近代的な習慣を重視しながら観光客の身体を前景に置くわけである。そして、その「観光客」というヒトに、日本人、西洋人といった区別はない。すなわち、ここでの被写体の役目は、人種や民族文化ではなく、ホテルの客かホテルの従業員であるかの基準で区別されているわけである。このように人種間の区別なく被写体を設けることは、観光写真の歴史において希有なことといえる。

明治期の日本において、外国人観光客向け観光写真の制作や販売は、主として日本人が担っていた。しかし、これらの写真は、あたかも日本（もしくは日本人）を外国人の為の見世物としているかのような印象を強く与える。表紙の説明は英字のみで、写っている人物は観光の主体ではなく、景色と同様に観光のまなざしの対象として利用されている。「也阿弥ホテル」の場合、人物を写した絵葉書自体が少ないものの、ある写真の中には京都の景観の前に舞妓のイメージが重ねられているものもあり、これもまた上記の好例であると言えよう⁴⁶⁾。(同じような芸妓が描いている絵葉書は図9でみられる)。「也阿弥ホテル」と「都ホテル」の絵葉書の相違については幾つかの要因が指摘できるが、ここでは差し当たって両ホテルの間に重要な相違点があることを強調しておきたい。

「也阿弥ホテル」を紹介する記事や写真のなかには、地元の住民たちが西洋料理を食べながら特別な宴会を楽しむ様子が描かれたものもあり⁴⁷⁾、日本人の役割は従業員に限られたものではなかった。これはまさしく、このホテルが外国人向



図9 絵葉書 「THE YAAMI HOTEL, KIOTO, JAPAN」。也阿弥ホテル。青羽古書店 (<http://www.aobane.com/books/60>) より

けの宿泊施設であるとする事業上のイメージ戦略の一環であった。しかしながら、英文旅行記では、ローカルの利用者については触れることがないため、事実上の人種的な隔絶がそこにはあるようにもみえる。「都ホテル」が開業した頃、「也阿弥ホテル」のような事業は、外国人の目にも時代遅れに映るようになってきた。例えば、アメリカ陸軍士官のルイ・ムービン・モースは、休暇で日本を旅していた時の回想で「也阿弥ホテル」と「都ホテル」の区別を明確に論じている。それは、サービスや設備の質の優劣などではなく、双方とも近代的上等なホテルであるものの、一方は外国人しか利用できない施設、そしてもう一方は日本人観光客も平等に利用できる施設であるという点の違いであった。かくして、「也阿弥ホテル」を過ぎ去りし時代の「残滓」と位置づけたモースは、「都ホテル」に宿泊することになる⁴⁸⁾。有山輝雄が述べたように、娯楽旅行のあり方は変貌しつつあったし、日本人もまた「見る主体になろうとした」のはまさにこの20世紀の初めのことである⁴⁹⁾。「都ホテル」の絵葉書は、こうした変化を反映したものであると同時に、その見るという行為の制度化を外国人観光客にも、また日本人観光客にも促すといった意義を孕むものなのであった。

むすびにかえて

『ツーリスト』というジャパン・ツーリスト・ビューローが刊行していた旅行雑誌の1939年10月号は、英文で日本のホテルと旅館の特集を組んでいた。その中で、東京鉄道ホテルの支配人が日本におけるホテルの歴史を三つの発展段階に区分して論じている。まず第1段階は明治と大正の時代で、言うまでもなく欧米に倣うという過程である。続く第2段階では、欧米にひけをとらないホテルが日本の専門家によって設計され、建造されるようになった。そして最後の段階は、欧米のホテルに取って代わる「純粋な日本のホテル」が登場する未来であった⁵⁰⁾。もちろんこれは、日中戦争の最中であつての国家主義的な言説として読まなければならないが、記事の歴史的な物語りの中に「也阿弥ホテル」のようなホテルを位置づけられないのは一定の意義があるものと思われる。

本稿で論じてきたように、「也阿弥ホテル」とは様々な主体が直接関係するハイブリッドな空間であった。その結果、英文旅行記で語られた外国人中心な観光のモデルに一石を投じ、また他方では、1939年の『ツーリスト』で示された

日本のホテルの発展段階とその根本的なイデオロギーにも疑問を投げかけてもいる。さらに、この検討は論文冒頭に紹介した「私の視界に入るすべてを支配する者」のような言説的な解釈に対する疑念も浮かび上がらせる。つまり、「也阿弥ホテル」をはじめ円山から眺望する京都の景観の価値向上を、外国人観光客の権力という観点からのみ分析してはならない。なぜなら、このプロセスは複雑な交渉に基づくものであって、観光客以外にも介在する人が多数いるという点を見落としてしまいかねないからである。そして、ここにはさらに、京都特有の環境的なアフォーダンスも重要な役割を果たしていた。

こうして観光客自身を中心から外し、間主観かつ物質界のネクセスのなかに位置づけることにより、観光のまなざしを身体的な「意味づけ」としてアプローチすることができる。本論文は実験的に、観光客を「見るもの」だけではなく「五感のある身体」と捉え、特定の場所と時代のなかで分析を試みてみた。近代観光の中では視覚が重視されるが、観光客はモノに触れ、味わい、嗅ぎ、聴くことを体験する為にお金と時間をかけて移動する。それらすべてが旅行で得られる大切な印象を構成しているのである。身体の体験を旅行記から読み取る際には慎重な分析と考察が必要であろうが、上述のとおり、旅行の楽しみや、あるいは疲労感などを、身体と絡ませたかたちで表現することは決して珍しくない。それでも尚、言説的な権力という問題を見落としてはならず、観光客の楽しみを可能にする、観光客の疲れを緩和する人々への言及にはさらなる研究を要する。彼らの肉体的な労働のみならず感情労働についても十分な検討が必要であろう。20世紀以降、日本人観光客も外国人観光客も同じような観光を享受してきた。しかしながら、観光に携わる人々や取り巻く環境といった、観光をめぐる全ての世界においては、社会階級、ジェンダー及び人種という言説にそれぞれの役割が依然として与えられているという事実を見落としてはならない。あるいは、こうした言説に規定づけられているといっても過言ではあるまい。誰しものが、観光に抱く感情を適切に表現できるようになったわけではないのである。

注

- 1) L. C. Goodwin, *A Winter in Japan and China* (n. p. 1890), 40.
- 2) Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation* (New York:

Routledge, 1992).

- 3) Judith Adler, "The Origins of Sightseeing," *Annals of Tourism Research* 16 (1989) : 7-29 (23).
- 4) John Breen, Maruyama Hiroshi, Takagi Hiroshi, eds., *Kyoto's Renaissance : Ancient Capital for Modern Japan* (Folkstone : Renaissance Books, 2020). 出村嘉史『京都東山山辺における近代以降の景観変容に関する研究』京都大学、2003年、博士論文。今江秀史「名勝円山公園の開設から継承の歴史」『京都市文化財保護課研究紀要』、2019年3月2号、117-150。丸山宏「京都円山公園成立前史」『造園雑誌』、1984年47巻5号、8-12。Alice Y. Tseng, *Modern Kyoto : Building for Ceremony and Commemoration, 1868-1940* (Honolulu : University of Hawai'i Press, 2018).
- 5) 明治初中期のインバウンド観光についての先行研究は、W. Puck Brecher, "Contested Utopias : Civilization and Leisure in the Meiji Era," *Asian Ethnology* 77 (2018) : 31-53、Christine M. E. Guth, *Longfellow's Tattoos : Tourism, Collecting, and Japan* (Seattle : University of Washington Press, 2004)、と工藤泰子「明治初期京都の博覧会と観光」『京都光華女子大学研究紀要』、2008年46号、77-100。京都のインバウンド観光とホテルの関係についての研究は、天野太郎「外国人向けホテルの黎明」丸山宏、伊從勉、高木博志 編『みやこの近代』思文閣出版、2008年、220-221、と Ai Fukunaga, "The Miyako Hotel as an actor for the Hon. Henry Marsham's collecting of Japanese ceramics in Kyoto," *Journal for Art Market Studies* 2 : 3 (2018)。
- 6) Emily Höckert, Monika Lühje, Heli Ilola, Erika Stewart, "Gazes and Faces in Tourist Photography," *Annals of Tourism Research* 73 (2018) : 131-140 (132).
- 7) Alex Gillespie, "Tourist Photography and the Reverse Gaze," *Ethos* 34 : 3 (2006) : 343-366。Darya Maoz, "The Mutual Gaze," *Annals of Tourism Research* 33 : 1 (2006) : 221-39。Omar Moufakkir and Yvette Reisinger, eds., *The Host Gaze in Global Tourism* (Wallingford : CABI, 2013)。アフェクト理論については Margaret Wetherell, *Affect and Emotion : A New Social Science Understanding* (London : Sage, 2012)。
- 8) Höckert et al., "Gazes and Faces in Tourist Photography," 132.
- 9) 非表象理論などの討論については Wetherell, *Affect and Emotion*.
- 10) Bruce R. Smith, "Premodern Sexualities," *Modern Language Association* 115 : 3 (May 2000) : 318-329 (326).
- 11) 禁門の変に伴う大火。
- 12) 例えば、Alexander Graf von Hübner, *A Ramble Round the World, 1871*, vol. 2, trans. by Mary Elizabeth A'Court Herbert Herbert (London : Macmillan and Co., 1874), 48.
- 13) Tseng, *Modern Kyoto*, 27.
- 14) 今江「名勝円山公園の開設から継承の歴史」、118。

- 15) 出村『京都東山山辺における近代以降の景観変容に関する研究』、141。
- 16) 丸山「京都円山公園成立前史」、8-12。
- 17) 出村『京都東山山辺における近代以降の景観変容に関する研究』、161。
- 18) 工藤「明治初期京都の博覧会と観光」。
- 19) “The Exhibition of Japan,” *Times* (19 November 1872) : 2.
- 20) 丸山「京都円山公園成立前史」、9。
- 21) 石田有年 編『都の魁 工商技術』石田戈次郎、1883年、85。京都ホテルグループ『京都ホテルグループ130年の歴史』、(<https://www.kyotohotel.co.jp/history/> 閲覧日：2020年11月10日)。
- 22) R. C. W. Reveley Mitford, *Orient and Occident* (London: London, W. H. Allen & co., 1888), 110-11.
- 23) 今江「名勝円山公園の開設から継承の歴史」、132。
- 24) Basil Hall Chamberlain and W. B. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan*, 4th ed. (London: John Murray, 1894), 297. また、M. Ichihara, City Council of Kyoto, eds., *The Official Guide-book to Kyoto and the Allied Prefectures* (Nara: Meishinsha, 1895), 3, 105, 166。
- 25) Srilata Ravi, “Modernity, Imperialism and the Pleasures of Travel: The Continental Hotel in Saigon,” *Asian Studies Review* 32 (December 2008) : 475-490.
- 26) W. E. L. Keeling, *Tourists' Guide to Yokohama, Tokio ... Kioto, Osaka, Etc., Etc.* (Tokyo: Sargent, Farsari and Co., 1880), 79. Ernest Mason Satow and A. G. S. Hawes, *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan* (Yokohama: Kelly and Co., 1881), 298. 下記に触れるテキストだが、山本覚馬の「Guide to the Celebrated Places in Kiyoto」(1873)では三条大橋は旅程の中心になっているが、1880年代の名所記などにも同じ役割が見られる。
- 27) Walter G. Dickson, *Gleanings from Japan* (Edinburgh: W. Blackwood and sons, 1889), 286-87.
- 28) Ralph Watts Leyland, *Round the World in 124 Days* (Liverpool: G. G. Walmsley, 1880), 156, 149. 他は M. B. Cook, *Japan: A Sailor's Visit to the Island Empire* (New York: John B. Alden, 1891), 115、と Lord Ronald Gower, *Notes of a Tour from Brindisi to Yokohama, 1883-1884* (London: Kegan Paul, Trench and co., 1885), 65-66。「他阿弥ホテル」までの道を細かく描写する例外には Mitford, *Orient and Occident*, 108-10。
- 29) “The Exhibition of Japan,” *Times* (19 November 1872) : 2.
- 30) Tseng, *Modern Kyoto*, 12.
- 31) Keeling, *Tourists' Guide*, 79.
- 32) Anna Brassey, *A Voyage in the “Sunbeam”* (London: Longmans, Green, and Co., 1878),

339.

- 33) 『東山名勝図会』。今江「名勝円山公園の開設から継承の歴史」、123からの引用。
- 34) 出村『京都東山山辺における近代以降の景観変容に関する研究』、130-44。
- 35) Yamamoto Kakuma, *The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Places for the Foreign Visitors* (Kyoto : Niwa, 1873), 13.
- 36) Takagi Hiroshi, "The Restoration of the Ancient Capitals of Nara and Kyoto and International Cultural Legitimacy in Meiji Japan," in Robert Hellyer and Harold Fuess, eds., *The Meiji Restoration : Japan as a Global Nation* (Cambridge : Cambridge University Press, 2020), 249-65 (255).
- 37) "Kyoto as a Resort of Foreign Tourists," *Japan Times* (2 July 1899) : 3.
- 38) Cook, *Japan*, 118-22.
- 39) Wetherell, *Affect and Emotion*, 16.
- 40) Cook, *Japan*, 128.
- 41) Douglas Sladen, *The Japs at Home* (London : Hutchinson and Co., 1892), 233.
- 42) Edward Smith Bridges, *Round the World in Six Months* (London : Hurst and Blackett, 1879), 76.
- 43) 例えば、Maturin Murray Ballou, *Due West ; or Round the World in Ten Months* (Boston and New York : Houghton, Mifflin and company, 1884), 67.
- 44) Brassey, *A Voyage in the "Sunbeam,"* 346. Cook, *Japan*, 129 ; Hugh Wilkinson, *Sunny Lands and Seas : A Voyage in the S. S. "Ceylon"* (London : John Murray, 1883), 178.
- 45) "The Hotels of Japan," *Times* (19 July 1910) : 69.
- 46) この「View of Kioto, Japan, from the Yaami Hotel」(ky480) という絵葉書は「絵葉書資料館」のホームページで確認できる。(https://www.ehagaki.org/shopping/eaja/eaja_a7/eaja_a7_26/eaja_a7_26_a1/eaja_a7_26_a1_a4/37575/)。
- 47) 「製糸場の開業式」『朝日新聞』(大阪) 1886年11月30日、2。「医師の懇親会」『朝日新聞』(大阪) 1887年1月7日、1。
- 48) L. Mervin Maus, *An Army Officer on Leave in Japan* (Chicago : A. C. McClurg & co., 1911), 303.
- 49) 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館、2001年、16。
- 50) K. Kemmotsu, "The Hotel Industry in Japan," *The Tourist* (October 1939) : 11.